

古典単元学習の試み

金子直樹

一 はじめに

古典に親しむ、ということとはむづかしい。現在の自分にとって縁遠い存在である古典を身近なものに感じるためには、むしろ現代との異質性を理解することが前提となるのではないかと思う。現代的な感性だけでも十分に理解し得るものならば、古典学習は言語抵抗の克服という試練のみとなってしまう。こういう授業では、する方も受ける方もつらい。同じ人間の仕業であるのに、現代に生きる自分の感覚では到底理解できない何ものかについて懸命に考えるときに、生徒にとつて古典が思考の対象として身近な存在となり得る。そのような思考のための課題を設定するにはどうすればよいのか、ということを考えている。

また、豊かに古典にふれる授業をしたいと願いながらも、一方では内容の精選をも迫られている。2単位なら、下手をすれば年間六十時間もない。その愚かな制約の中で、細切れにならず、生徒の思考を深めていくためにはどうすればよいのか、ということも現場の教員としては切実な問題である。

このような問題を考えながら、ここ数年、素材単元による授業を試みている。取り扱う作品の数はせいぜい学期に一つで、その代わりなるべく多くの章段を読む、というかたちである。単元学習をいう場合に、素材単元による学習というのはどうも評判がよろしくない(らしい)。なるほど、教材を順番に読んでいくだけではいかにも志が低い、と我ながら思うが、その中で生徒の思考の場を設定し、古典を身近なものとして捉えることができるのなら、有効な方法であるといえよう。

二 授業の計画

以下に、教材(素材)毎の例を挙げる。何れも学期を通しての実施で、時間数は二十時間程度である。

1 「徒然草を読む」(高校2年生、第二学期実施)

A: テーマ構成と扱った教材 (*印は、中学校の教科書をテキストにして実施。それ以外は原文をプリントで配布。)

(1) 様々な人間像—困った人達

- 八九段*奥山に猫またといふものありて、
二五六段*丹波に出雲といふ所あり。
十一段*神無月のころ、栗栖野といふ所を過ぎて、
五二段*仁和寺にある法師、
五三段 これも仁和寺の法師、
五四段 御室に、いみじき児のありけるを、
一二五段 人に後れて四十九日の仏事に、
二〇九段 人の田を論ずる者、

(2) 兼好のものの見方—自然・人間・社会

- 十九段 をりふしの移り変はるこそ、
一三七段 花は盛りに、月はくまなきをのみ
一五五段 世に従はむ人は、
七三段 世に語り伝ふること、
四一段 五月五日、賀茂の競べ馬を見はべりに、
五九段 大事を思ひ立たむ人は、
七四段 蟻のごとくに集まりて、
一八八段 ある者、子を法師になして、
一八九段 今日はそのことをなさむと思へど、
(3) 様々な人間像—すばらしい人達
九二段*ある人、弓射ることを習ふに、
一〇九段*高名の木登りといひしをのこ、
二二一段*園の別当入道は、

一五〇段 能をつかむとする人、

一六七段 一道に携はる人、

一八七段 よろづの道の人、

二一五段 平宣時朝臣、老いの後、昔語りに、

一八四段 相模の守時頼の母は、

B：授業のねらい

(1) 「様々な人間像—困った人達」では、大笑いしながら読む。その中で、「兼好はなぜこのような人々の姿を書き残したのか」ということを単元を通しての課題とする。

(2) 「兼好のものの見方—自然・人間・社会」では、無常という言葉をめぐって、生徒の持っている観念(マイナスイメージ)に対して、兼好の言説の(意外な)積極性を読みとる。ただし、「兼好の思想」や「無常」という答え・内容には深入りしない。

(3) 「様々な人間像—すばらしい人達」では、困った人達とすばらしい人達との共通点を探す。兼好が、この両者についての記事を書き残した理由を考えることを通して、兼好の物の見方、考え方にせまる。

C：まとめの作業

○「兼好の見た人間」というタイトルで作文を提出する。

内容は、徒然草に描かれた、「様々な人間像(困った人達、すばらしい人達)」と、「兼好のものの見方」との関わりを考

察する。なお、作文にあたっては、

- ・兼好は、このような人達の姿のどこに興味を持ったのか、
 - ・兼好は、このような人達の姿をなぜ書き残したのか、
 - ・兼好は、自らのものの見方をどのようにとらえていたのか、
 - ・兼好は、自らのものの見方をどのようにとらえていたのか、
- などなど、アプローチの仕方はそれぞれが自由に設定すること。
内容については、困った人達、すばらしい人達の両者を統一して取り上げたものでも、どちらか片方についての言及でも構わない。

2

「土佐日記を読む」(高校1年生、第三学期実施)

A:扱った教材(*印は、教科書に採録。それ以外は原文をプリントで配布。)

十二月二十一日～二十六日(*門出II部分)

一月七日(ゆく先に立つ白波)

一月十七日、十八日(棹は穿つ波の上の月を)

一月二十日、二十一日(昔、阿倍仲麻呂と言ひけむ人は/黒

鳥のもとに白き波)

二月四日、五日(*忘れ貝/楫取の心は神の御心)

二月六日、七日(心地悩む船君)

二月九日(渚の院)

二月十五日、十六日(発ちて行きし時よりは/*京に入りたちてうれし)

「古今和歌集 真名序・仮名序」

B:授業のねらい

*読む視点の明確化①

「なぜ、紀貫之は女のふりをして土佐日記を書いたのか」ということを、単元を通しての課題とする。読解した部分の、作品全体への還元をはかり、学習目標を明確化する。

*読む視点の明確化②

「語句・表現や内容などで、対比されているものに注目して読む」ということを意識する。

内容の多様性(特に諧謔性)に触れ、また、表現や修辭の豊かさ、巧みさ(特に和歌)を読みとる手だてを示して、文学としての古典理解の基礎を学ぶ。

C:まとめの作業

○「土佐日記について」というタイトルでレポートをまとめる。書き方のヒントとして、以下のことを提示した。

1.絞る。

土佐日記の中のいくつかのテーマ

和歌について:紀貫之は、和歌とはどのようなものかといっているのか。

亡娘について:紀貫之は、亡き娘についてどのように追憶しているのか。

人間への観察:土佐日記に見られる紀貫之の人間への見方はどのようなものか。

表現の面白さ:土佐日記には、どのような表現の面白さ、

巧みさが見られるか。

等々について、自分が取り上げたいテーマに焦点を絞って考えると、書きやすい。

2 広げる。

自分が取り上げようと思うテーマの、他のテーマとの関連性や、また、土佐日記全体に関わるテーマ「紀貫之は、なぜ土佐日記の冒頭を、「男もすなる日記といふものを、女もしてみむとてするなり。」としたのか。(なぜ土佐日記の末尾を「とまれかうまれとく破りてむ。」としたのか。」との関連性を考えることが出来る、文章の論旨がより明確になって、よりよいものが書きやすい。

3

「大鏡を読む」(高校2年生、第二学期実施)

A: テーマ構成と扱った教材 (*印は、教科書に採録。それ以外は原文をプリントで配布。)

(1) 古代人の夢

1 師輔「おほかたこの九条殿、いとただ人にはおはしませぬにや、」(右大臣師輔)

2 兼家「堀河摂政殿のはやり給ひし時に、この東三条殿は御官どもとどめられさせたまひて、」(太政大臣兼家)

(2) 権勢争い

1 *兼通対兼家「堀河殿御病重くならせ給ひて、今は限りにておはしませしほどに、」(太政大臣兼通)

2 朝成対伊尹「みな人しろしめしたることなれど、朝成中納

言と一条摂政と同じ折の殿上人にて、」(太政大臣伊尹)

3 誠信対斉信「男君太郎は、左衛門督ときこえさせし、悪心起こして失せ給ひにしあしさまは、」(太政大臣為光)

(3) 宮中の女性像

1 芳子「御女、村上の御時の宣耀殿の女御、かたちをかしげにうつくしうおはしけり。」(左大臣師尹)

2 *安子「藤壺・弘徽殿との上の御局は程もなく近きに、」

(右大臣師輔)

3 綏子「対の御方と聞こえし御腹の女、大臣いみじうかなしくし聞こえさせ給ひて、」(太政大臣兼家)

4 道隆三女「三の御方は、冷泉院の四の御子帥宮と申ししこそは、」(内大臣道隆)

5 *詮子「女院は、入道殿をとりわき奉らせ給ひて、いみじう思ひ申させ給へりしかば、」(太政大臣道長)

(4) ライバル激突道長対伊周

1 道長の幸運「その年の祭りの前より、世の中きはめてさわがしきに、」(太政大臣道長)

2 *弓争い「世間の光にておはします殿の、一年ばかり、ものを安からず思しめしたりしよ、」(太政大臣道長)

3 石山詣・上巳祓「また、故女院の御石山詣でに、この殿は御馬にて、」(太政大臣道長)

4 前払「されど、げに必ずかやうのこと、我が怠りにて流され給ふにしもあらず。」(内大臣道隆)

5 双六「また入道殿、御嶽に参らせ給へりし道にて、帥殿の

方より便なきことあるべしと聞こえて、」(内大臣道隆)

(5) 才と大和魂

1 *道長左遷「右大臣は、才世にすぐれめでたくおはしまし、」(左大臣時平)

2 時平「あさましき悪事を申し行ひ給へりし罪により、」(左大臣時平)

3 隆家「この中納言は、かやうに、えさがたきことの折々ばかり歩き給ひて、」(内大臣道隆)

B: 授業のねらい

*同じ人物についての挿話を読み重ねたり、系図などを用いて人物同士のつながりを意識しながら読み進めることによつて、古典の世界の登場人物に親しみをもちつと同時に、彼らが生きている習俗が現代とは異なるものであることを理解する。

*現代とは異なる時間軸にある古典の世界(の人間像)の、なお現代に生きる私達にも共通する点を読みとる。

C: まとめの作業

○次の三つの中から自分の書きやすいパターンを選び、レポートを提出する。

1 授業で扱った単元「古代人の夢」、「官職争い」、「宮中の女性像」、「ライバル激突道長対伊周」、「大和魂」、の中から、一つにテーマを絞り、自分の意見、読みを書く。

2 自分でテーマを設定し、単元の枠を取り払つて幾つかの内

容を関連させながら、自分の意見、読みを書く。

3 その他、授業で扱った以外の内容を取り入れて、自分の「大鏡」の世界を述べる。

三 生徒の感想

生徒が提出したレポートや授業毎の「学習記録」の中からいくつかを紹介する。なお、傍線は金子によるものである。

1 「徒然草を読む」から

① (まとめの作文から) 人間はいつか必ず死んでしまう。これが土台だ。この世が無常だと思ふからこそ花の散る一瞬一瞬が胸に迫るように、人間の命に限りがあると常に思つていた兼好には、人間がとて愛おしく思えたのではないだろうか。立派に生きるためにすべき事、すべきでない事を色々と言ひついでいる裏には、「人間なんてものは所詮こういうことをやつちやうもんなんだよね。」という許しとも言えるものがある。生死という人間の力ではどうすることもできない制限の中で、その制限に気づかずには一生懸命生きていく。そんな人間はとてもちつぽけで、そのちつぽけな人間達が必死に東奔西走している姿は、何ともいじらしく、果ては哀しい。そういう親のような目で人間を見ていたのではないか。名利を求めて生きる人、ヒミツ練習をして上品なデビューを飾ろうとする人、目の前の事で手一杯で本当にやりたいことが出来ない人、この人達はこの人達で、不器用なりに一生懸命生き

ているのであって、兼好はこういう人々を単に批判しているのではない。こういう行動をしてしまうのは人間の常、持つて生まれ共通の性質であつて、それをも含めて人間を好きなのだ。「私達、こうして気張つて走り回つても結局のところ死ぬんですよ。少し力を抜いてあたりを眺めてみようよ。」という寛大な忠告をしてゐるように思える。

「困つた人達」に登場する人みなに共通することは、「真面目である」ということだ。本人はいつて真面目で一生懸命やつてゐるにも関わらず、結果は期待通りには行かない。そう簡単に珍しいことは起こらない。いくら必死で取り組んでも、方向が過つていればおかしなことになる。要するに、「人生こんなもんだよ。」と言つてゐるのだ。「あまりがむしやらに頑張り過ぎなくてもいいからさ。」と言つてゐるようだ。噂によると、「猫また」に遭遇した法師は兼好自身だとも聞く。このことから考えても、兼好が「困つた人達」について書いたのは、人がやつてしまふ失敗を認める意味であり、また、皆が一生懸命生きてゐることを受け止めて、それなのにいつか死が来ることを思うといたたまれなくなつて、人々にあまり期待を持たせないようにする意味であると思う。

2 「土佐日記を読む」から

①（学習記録から）今回は土佐日記の二月六日、七日の授業でした。今日の紀貫之はすごく変でした。いつもなら「紀貫之先生の和歌講座」を開いて相手を負かしたり、「和歌とはかくなるも

のだ」と説いてみたり、自信満々な人というイメージが強かつたのですが、今回は謙遜してみたり、下手な歌を二つも詠んでみたり、とにかく変でした。どうしてでしょう。

文中に「心地悩む船君」とか「船君の病者」とか「病をすれば詠めるなるべし」とかいつた記述があつたので、紀貫之も船酔いをしていたのでしょうか。それとも精神的にスランプに陥つていたのでしょうか。それにしても、どういう歌が良くて、どういう歌が悪いのでしょうか。何となく（淡路の大御は都が近くなつたのを喜んだ気持ちの良い歌で、それに対して紀貫之は調子が悪そうな歌ということから）分かるような気はするんですけど……。

②（学習記録から）久々に他人の悪口やらダジャレを言わない真面目な貫之を見た美しい九日であつた。渚の院を訪れたということは、もう京都はすぐそこだ。やつと帰れて貫之も喜んでゐるに違いない。渚の院と言えはなつかしの惟喬親王と中将たちが男の友情を育んだ所だ。そのことを、貫之の時代の人々がみんな知つていたとは、今思えば渚の院という話もすごいエピソードだったんだなあと感動する。この日の二首の歌はどちらも「変わらない人の気持ち」を詠んでゐる。そしてその後、亡くなつた娘を思う気持ちが書いてある。娘への想いもずっと変わらないのだ、と思う。実に美しい日記だ。

③（まとめの作文から）娘を想う歌を詠んでゐると、娘に対する鎮魂と言うよりむしろ、辛い、悲しい、恋しい、といった自分の感情ばかりが目立つ歌に思える。確かにそういう気持ちの方が人間にとつてより本質的であるし、子供に先立たれた親の姿とし

て普遍的になるのではないだろうか。いつの時代でも、どこでも、子供に死なれると言うのは悲しいことなのだから。

こう考えると、貫之が作品に虚構を用いた理由が理解できるような気がする。自分ではない女性に仮託することによって自分を公的身分から解放し、一人の親とするのもちろんのこと、三人称による自分の客観視を行い、自分を小説の登場人物としているのである。作品の中の「ある人」はもちろん貫之であるが、私はむしろ貫之ではなく「ある人」のままであるのが正しいのだと思う。作品の登場するのは子供を持った親であり、その哀惜を物語の根底として話を進めているのである。「ある人」とは、人間的な感情を持った普遍的な存在であり、貫之が試みたのは、この普遍化であつたのではなからうか。

④(まよめの作文から)「土佐日記にはとても多くの表現上の工夫がなされている。その中でもっとも多く、巧みに使われているのが対比の表現である。男が女として日記を書く、白い波と黒い鳥、歌の下手な大人に上手な子供、亡き娘のことを忘れない忘れたくない……。さらに、これら表現は、話が進むにつれてふくれ上がってくる、変わらない自然と変わる人の心という大きな対比を引き立たせるためのものではないかと僕は思う。(中略)自然の普遍性、それだけを信じて良いものとして京へ帰る喜びとしていたのだが、最後の最後に京の自宅で、自然を象徴する千年生きたる松が、たつた五、六年でなくなっている。読者も自然が変わるものであることを認めざるを得なくなる。貫之の思いの通り。不変と思つたものが変わってしまうのである。

それでは何が不変なのか。結局、不変であるものは、亡き娘はもう戻らないと言う事実なのではないかと僕は思つた。貫之は土佐日記の文章、和歌、表現で娘を想い、それを自分から取り除くがごとく、また思いを深めるようにこの日記を書いたのではないかと思つた。

3 「大鏡を読む」から

①(学習記録から)古文を読んでいると、昔の人と現代人である私達との考え方があまりに違うのに驚かされることしばしばですが、「女性」というものの立場、あり方が随分と消極的なものだったということは、最も強く古代と現代との違いを表していると思います。帝は、単に安子が嫉妬をしてあんな事をやらせているのではなく、裏で男がいろいろな策を巡らしていると想像する所など、まさに当時の風習というか考え方をよく表していると思ひました。それにしても帝はひどいやつだと思ひます。安子という人があるながら、かわいくて才能があるからといって芳子を愛し、しかも安子が死んだらやっぱり安子がよかつたなんて、いつたい女性をなんだと思つているんだ、という感じですよ。それでも当時の女性は、それが当たり前だったために、そんなに不満を覚えなかつたのでしょうか。長い年月の間に、人の考え方や感じ方がこうも変わってしまうというのは興味深く、そこが古文の魅力でもあるなあと思ひました。

②(学習記録から)今回の授業は「道長対伊周」の中でも「今までろくな事がなかつた伊周が名替挽回する話だ」ということだっ

たが、終わって見たら結局は、太った伊周が情けないという話だった。初めの方の「万の事身に余りぬる」とか「御才日本に余らせ給ふ」とあるのは、結局後のエピソードを引き立たせるための叙述に過ぎないような気がした。でも、このような伊周の様子は現代の私にも通じる場所があるように思えて、完璧な人物として描写されている道長よりも親しみを感じる。

この伊周もそうだが、「大鏡」には今までの古典になかった「平安時代の人間」の描写が多かったように思う。平安時代の女性も現代の女性と同じように嫉妬したり、ヒステリックになったりするんだということが分かったし、男性も、権力をめぐって争ったり、いじめたりしていることも知った。現代と対比して読んでいく「大鏡」はおもしろかった。

③（まよめの作文から）「道長対伊周」では、これでもかというくらいに道長がすばらしく、そしてそれをいつそう強調するかの様に伊周は道長にとことん負けている。私は単純な方なので、話毎に道長が伊周をスマートに負かしてしまおうとすつきりして、気持ちよかったです。

これをふと考えると、時代劇を見るのに似ています。勝つのは誰だか分かっているのに、その人が勝をおさめるとすつきりする……そういうおもしろさが大鏡の中にはあるのかも知れません。もしかしら、歴史とか物語というものは、人間がすつきりするために作り出したのか、あるいは、人間は昔から歴史や物語の中にすつきりする気分を見つけていたのでしょうか。

④（まよめの作文から）道長と伊周との関白を巡っての争いを

読んでいて分らないのは、常に道長が勝っているということだ。運命には必然性がつきもので、道長は「なるべくして」関白になった、ということを作者は言いたいのだろうが、実際の政権争いはそう甘いものではなく、また、伊周も決して「嬰兒のやうなる殿」ではなかったのだらうと思う。実際、一度や二度は伊周が道長を打ち負かして、道長がそれに対して執念を燃やす、という場面があつてもよいのではないかと思う。「大鏡」は百五十歳を超えるような二人の老人の対話という形式を取っているので、老人が道長の勝つところしか覚えていないかつた、ということなのだろうが、僕の考えとしては、虚構だと思う。道長が全ての面において優れていて、関白としては彼の方が適任なのだ、ということと言いたかつたために、後から作つた虚構だつたのだらう。

四 よりよい單元構成のために

「徒然草を読む」、「土佐日記を読む」、「大鏡を読む」何れの單元においても、授業の大部分は古典作品そのものの持つおもしろさに寄り掛かっている。教師自身が読んでおもしろいと思う文章を授業で扱うのは、何とも楽しいことであるし、このおもしろさをぜひ生徒たちにも伝えたいと思う。要は、教師だけの独り善がりには終わるのではなく、その作品の持つおもしろさを取り込めるような目標を立てるということだろう。そのためにも、まずは作品のおもしろさを感じ取る教師自身の読みの確かさが、さらにはそれを伝える相手である生徒への理解の深さが求められる。この

おもしろさをこういう生徒たちに感じ取らせるには、このような課題の設定が有効である、こういう生徒たちにこのおもしろさを理解させるには、このような出会いがたはどうか、という構想を築き実現していくための基本は簡単なようではなかなかわつかしい。

五 おわりに

二学期に「大鏡を読む」の学習を終えて、三学期には同様に「枕草子を読む」として日記的章段を重ねて読んでいた中で、次のような生徒の感想があった。

今まで読んできた枕草子と大鏡では伊周の扱いがまるつきり違う。先に大鏡を勉強したからか、「伊周は道長に何度も負けるデブで無様で子供っぽい奴だ。」と思っていたけれど、枕草子では「才のあふれるすばらしいお方」とほめちぎっている。やっぱり、作者の主観的な感情と、どちらの味方であるのかということ、書き方も全く違ったものになってくるのだろう。

さて、その「すばらしい中関白家」が急に落ち目になってきている。大鏡でも宮中の人物の栄枯盛衰をいろいろと見てきたけれども、この「仲がよくて、優雅で、すばらしい中関白家」が衰退していつてしまうのを見るのは悲しい。清少納言が、嫌いなタイプに違いない大進生昌を相手にこれだけ頑張っているのも、きつと悲しいからではないだろうか。先生からいただいた枕草子年表

からすれば違うのかも知れないけれど、もしかしたら、あの伊周のことを清少納言があんなにほめているのも、悲しかったからも知れない。悲しいからこそ、「仲がよくて、優雅で、すばらしい中関白家」のことを書いておきたかったのではないだろうか。
(大進生昌が家に、の学習記録から)

授業を進めていく中で、例えば「帥殿伊周」という人物は生徒にとつてのお馴染みさんとなっており、そこから枕草子の執筆について思いを巡らせることができるようになった力というものは、(この生徒の推測の当否は別にしても)立派な学力であると思う。バラ売りの文学史的な知識としてではなく、ある時代のある場所での人間の生き方にふれることによって、現代の自らの人間への認識を深めることができる。十世紀末の宮中での生活は、二十世紀末の市民社会の生活とは根底から異なる。その差異を認識することによって、なお共通して流れる人間性や人間が生きるための文学の力というもののはつきりと見えてくるのだと思う。そのような出会いをもたらずものとして、一人の作者、一つの世界を重ねて読み進めていくかたちでの単元学習は有効な方法であるといえよう。

(広島大学附属福山中高等学校)